教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）における能動的学修化の試み(2)

岡谷　英明（高知大学）
宮田　　龍（城西中学校*）

Trial of the active learning program construction in educational science basics practice II (pedagogy) (2)

Hideaki Okatani（Faculty of Education, Kochi University）
Ryo Miyata（Josei Junior High School in Kochi City）
*記載は2018年時点、現在はイスタンブル日本人学校

要　約

平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）に能動的学修を取り入れ、その成果を明らかにすることが本研究の目的である。ただし、能動的学修には不明確な部分も多い。能動的学修に大きな影響を与えているアクティブ・ラーニングにおいて、主体ならびに主体性はどのようなものとして理解したらよいのかといった疑問が存在している。そこで、教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の実践を分析するにあたって、まず能動的学修と主体あるいは主体性の関係を考察した。次に、この考察を踏まえ、能動的学修を取り入れる際の原理について示した。最後に、能動的学修を取り入れた平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）をそれ以前の講義と比較することによって、その成果を検証した（前半部は『高知大学教育実践』第31号に掲載されている）。

キーワード：能動的学修　アクティブ･ラーニング　教育科学　授業改善

Ⅲ　能動的学修化の原則を踏まえた具体的な授業案

前半部では、まずアクティブ・ラーニングについて説明し、アクティブ・ラーニングにおいて主体性はどのように理解されているのかという問題について考察してきた。フーコーの考え方を敷衍するならば、学習者を学習の主体とするために重要なことは学習者を主題としてのsubjectに従属させることであった。つまり、学習者は主題（subject）にとらわれ、主題を自分のこととすることによって学習の主体（subject）となるのである。また、学習者を学習の主体にするためには、さまざまな工夫が授業を構成する際に求められる。Ⅱでは、能動的学修化の原理として、目的や内容の追加、正解のない問題の提供、経験の再構成のための質の高い問題と他者といった能動的学修化の原理を示した。Ⅲでは、これらの原理によって平成25年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の授業シラバスを修正し、平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の授業シラバスをどのように作成したのかについて述べる。

1）平成25年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の概要

教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の概要を示しておこう。まず、教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の目的は以下のように定められている。「教育学や心理学に関する基礎的な学習の成果を踏まえ、より発展的、応用的な学習を行う。教育学分野所属者は、教育学に関する基礎概念を活用し、教育学的なテーマについての調査方法を習得する。」教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）は教育学分

野の教員３名がローテーションで３年に１回担当している。その際、上記の目的のもと、具体的な教授内容をどのように構成するかは各教員の判断に任されている。受講生は教育科学に関する基礎的な概念を習得するための講義を受講中であるか、あるいは受講し終えている。

教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）では、これまでに学修した教育学に関する基礎概念を活用し教育学的なテーマに取り組むが、本研究を進める論者は毎回のテーマを「高知県の中学生の学力向上」に設定している。高知県では中学生の学力向上が教育上の課題と認識されている。平成25年度全国学力・学習状況調査の結果によれば[1)]、高知県の「中学生は全国平均との差は依然厳しいものの、平成19年度調査からの改善傾向は継続している」ととらえられている。中学校数学Ａ問題正答率は全国平均と比較して－4.4、Ｂ問題正答率は－6.1であった。中学校国語Ａ問題正答率は全国平均と比較して－2.1、国語B問題正答率は－2.6であった。第２期高知県教育振興基本計画によれば[2)]、高知県の中学校の学力を「全国平均以上に引き上げる」ことが目標とされている。以上のような中学生の学力状況の改善策を提案をするために、平成25年度のシラバスでは、前半で学力問題に関する基本的な文献を購読し、学力問題についての学術的議論についての知識を獲得させることとし（表１）、後半で提案の内容をグループで討議させ、必要があれば調査するという内容とした。

＜表１　平成25年度の教育科学基礎演習Ⅱシラバス＞

回目	活　動　内　容
1	教育科学基礎演習Ⅱのオリエンテーション
2	高知県の中学生の学力状況の確認
3	『論争・学力崩壊』（中井浩一編、中公新書）の講読と討議
4	『学力低下論争』（市川伸一、ちくま新書）の講読と討議
5	『学力とは何か』（諏訪哲二、洋泉社）の講読と討議
6	『学力を育てる』（志水宏吉、岩波新書）の講読と討議
7	「いじめを生み出す優しい関係」『友だち地獄』（土井隆義、ちくま新書）の講読と討議
8	「学力問題を通して日本の思考停止状態を斬る」『新しい道徳』（藤原和博、ちくまフリマー新書）の講読と討議
9	中間プレゼンテーション作成
10	中間プレゼンテーション作成
11	中間プレゼンテーション（10分発表10分質疑応答）
12	中間プレゼンテーションの評価によるプレゼンテーションの見直し
13	最終プレゼンテーション作成
14	最終プレゼンテーションのリハーサル
15	最終公開プレゼンテーション（10分発表10分質疑応答）

２）平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の概要

能動的学修化の効果を検証するため、平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）のテーマも平成25年度のテーマと同様の「高知県の中学生の学力向上」に設定した。ここでは、高知県の学力状況が平成25年よりも若干改善されたことに留意しておきたい。平成28年度全国学力・学習状況調査の結果によれば[3)]、高知県の「中学校は国語・数学ともにいまだ全国平均には達してはいないものの、全国平均との差を縮めることができており、ここ数年足踏み状態にあった学力の伸びについて、その状況から脱する兆しを見せて」いる状況ととらえられている。中学校数学Ａ問題正答率は全国平均と比較して－3.7、Ｂ問題正答率は－4.0であり、中学校国語Ａ問題正答率は全国平均と比

較して－0.2、国語Ｂ問題正答率は－1.3という状況であった。以上のように、高知県の中学生の学力状況は全国平均に近づきつつあり、平成28年度の受講生が平成25年度とは違った視点で学力状況を理解する可能性がある。

平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の目的は、Ⅱに示した「目的や内容の追加」の原理にしたがって、以下のように修正した。まず、目的は、受講生が以上のような「高知県の中学生の学力状況についての知識を獲得すること、学力問題一般についての知識を獲得すること」に加え、「正解のない問題に対して、知識を再構成し提案する能力を身につけること、知識を再構成するために他者と討議し、能動的な活動を行う能力を身につけること」を加えた。Ⅱで示したように、目的や内容は実質的な部分と形式的な部分に分類しなければならない。そこで、学力という実質的な主題に取り組み、学力に関する実質的な知識を獲得することに加え、21世紀に必要とされる知識を再構成するために必要な能力形成という目的を追加した。

＜表２　平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱシラバス＞

回目	活　動　内　容
1	教育科学基礎演習Ⅱのオリエンテーション
2	高知県の中学生の学力状況の確認
3	『学力低下論争』（市川伸一、ちくま新書）の講読と討議
4	『学力とは何か』（諏訪哲二、洋泉社）の講読と討議
5	『学力を育てる』（志水宏吉、岩波新書）の講読と討議
6	「いじめを生み出す優しい関係」『友だち地獄』（土井隆義、ちくま新書）の講読と討議
7	「学力問題を通して日本の思考停止状態を斬る」『新しい道徳』（藤原和博、ちくまフリマー新書）の講読と討議
8	中間プレゼンテーション作成のための調査および討議
9	中間プレゼンテーション（10分発表10分質疑応答）
10	中間プレゼンテーションの評価を受けて、調査すべき内容を整理
11	最終プレゼンテーションに向けた調査（学生提案により県教育委員会訪問）
12	最終プレゼンテーションに向けた調査（学生提案により市立中学校訪問）
13	最終プレゼンテーションに向けた調査（学生提案により市立小学校訪問）
14	調査結果をふまえた最終プレゼンテーション作成
15	最終公開プレゼンテーション（10分発表10分質疑応答）

また、演習内容もこの目的にしたがって変更した。購読によって知識を獲得することに加えて、討議能力を育成するため、購読する分量を減らし、討議する時間を増やした。また、購読させた文献の内容紹介とともに自らのグループの意見を提案させた。これらのことによって、知識を獲得するとともにその知識をめぐる解釈の違いについて討論するという能力が向上すると考えた。演習の後半は、プレゼンテーションの内容を作成するという実質的な作業に加えて、最終プレゼンテーションに必要な調査を自主的に行うことのできる機会を設けた。学生は、高知県の中学生の学力問題を考えるうえで、高知県の中学校だけでなく、中学校と接続した小学校そして教育委員会への調査をすることを希望した。ここで、訪問した中学校が受講生に与えた影響を考察するために、中学校長が学力に関してどのような思いを持っているかを確認しておきたい。訪問先の中学校長は、「小学校での基礎学力が中学校の学力を大きく左右する。しっかりと基礎学力をつけている子どもが学ぶ意欲を持っていればぐんぐん伸びる。逆に生活習慣や基礎学力が身についておらず、自信とやる気

を失っている子どもは学力的に厳しい。中学校で補習や部活動等で自信を付けさせて学力を定着させるには時間がかかる。小学校も中学校も非行と低学力に陥ることのない教育実践を行うべきである」と考えていた。中学校長と同様に考えていた受講生は調査に小学校を含めたことで自信を深め、主題への関与をさらに強める演習内容となったことに満足していた。

Ⅱでは「正解のない問題の提供」という原理および「経験の再構成のための質の高い問題と他者」という原理に基づくことの重要性を紹介した。これらの原理にしたがって、平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の主題提案の方法を変更した。

まず、主題の質を上げるために、高知県の中学生の学力状況の確認をする際、元高知県教育委員会事務局に所属していた教員に参加してもらった。平成25年度に高知県の中学生の学力状況を確認する際に使用した資料は高知県教育委員会が作成している「全国学力・学習状況調査結果資料」であった。この資料から出発して学力向上策について思考して行くと、例えば、大学生による放課後学習室事業という提案がなされる。この提案はすでに広く高知県内で行われている施策であった。そこで、元高知県教育委員会事務局に所属していた教員に助けを借り、教育委員会の現状分析とそれを根拠とした方策について説明していただいた。現在行われている教育委員会の施策も同様に手探りの中から導き出されたものであることが話された。また、現在行われている施策にないことを提案するよう受講生に指示することによって、主題の質を高めることにした。

さらに、平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）においてとりわけ強調したのは「他者のことなど気にせず危ないと思っても自分のアイデアに賭ける」ことの重要性である。Ⅱにおいて、知識はいずれ作り変えられる可能性があり、大事なのは自分の思いついたアイデアや知識を常に他者との対話のなかで改善できる教育であることを指摘した。それゆえ、平成28年度の教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）では、文献購読の際には必ず自分たちのグループの意見を提案させ、討議の際にはまず自分の立場を明確に発言し、そのあとに根拠を述べるようにさせた。三宅が指摘していたように[4)]、②互いの考えの「違い」の見せ方には配慮しつつ、「他者のことなど気にせず危ないと思っても自分のアイデアに賭けるよう」にと、ことあるごとにファシリテートした。以上の修正を加えて学生に示したシラバスが表２である。

Ⅳ　能動的学修化の成果の検証

Ⅳでは、このシラバスに基づいた授業を行った成果を検証する。成果の検証は以下の３つの内容で行いたい。まず、平成25年度受講生と平成28年度受講生の最終プレゼンテーション内容を比較することによって提案内容が深まっているかどうかを確認したい。次に、平成28年度受講生の中間プレゼンテーションと最終プレゼンテーション内容とを比較することによって、能動的学修化のどの部分が有効であったかを確認したい。最後に、個々の受講生に焦点を当て、演習の事前と事後でどのような認識の深まりがあったのかを確認したい。

１）平成25年度受講生と平成28年度受講生の最終プレゼンテーション内容の比較

まず、平成25年度受講生と平成28年度受講生の最終プレゼンテーション内容を比較することによって提案内容が深まっているかどうかを確認したい（表３）。平成25年度受講生の提案内容は無償の学習支援、週６制の採用、高校進学サポート、完全給食率100％の達成、構成的グループエンカウンターに対する教師の力量の底上げといった内容であった。これらの提案のうち、高校進学サポートは大学生がファシリテートして高校生が中学生向けの合同進学説明会を行うというものであり、これまでにない提案である。また、給食の完全実施という提案は現在の子ども食堂と同様の考え方であり、学校の安心安全を提供し中学生を学習へと向かわせるという提案であった。これらは

＜表３　平成25年度受講生と平成28年度受講生の最終プレゼンテーション内容の比較＞

グループ名	タイトル	学力向上への提案
H25-A	高知県学力向上策－私たちにできること－	無償の学習支援
H25-B	高知県学力向上案－学習意欲を高めるには－	週６日制の採用
H25-C	高知県高知市中学生の学力を上げるために－大学生に出来ること－	school orientation meeting（高校進学サポート）
H25-D	高知県の中学生の学力を向上させるためにできること	完全給食率100％を達成する
H25-E	高知県の学力向上のために－クラスの雰囲気作り－	構成的グループエンカウンターに対する教師の力量の底上げ
H28-A	学力の向上＝基礎学力の定着	新たな通年授業の導入（大学のカリキュラム改革）
H28-B	高知県公立中学校学力向上にむけて	キャリア教育カリキュラム（現実のぞきみ科）の提案
H28-C	高知県の中学生－学力向上作戦－	シンガポールのバイリンガル教育の導入
H28-D	負のスパイラルを断ち切る－高知の中学生の学力を上げるためには－	長期の生活体験学習

＜表４　平成28年度受講生の中間プレゼンテーション内容と最終プレゼンテーション内容＞

中間プレゼンテーション			
グループ名	学力向上への提案	提案の根拠	能動的活動
H28-A	１探究型授業実践 ２マニュアル（テキスト）主体の教育 ３高知県独自の県内学力テスト	全国学力学習状況調査の結果	
H28-B	１知識活用授業の提案 ２総合的な学習の時間（現実のぞきみ科）の提案	よのなか科実績例（文献）	
H28-C	学力向上＝メタ認知向上		
H28-D	自尊感情の高まり・社会性のための通学合宿		

最終プレゼンテーション			
グループ名	学力向上への提案	提案の根拠	能動的活動
H28-A	新たな通年授業の導入（大学のカリキュラム改革）	チューター事業の成果（聴き取り調査） 大学のカキュラム改革（聴き取り調査）	市教育委員会への聴き取り調査 教育学部教員への聴き取り調査
H28-B	キャリア教育カリキュラム（現実のぞきみ科）の提案	学歴と生涯賃金の相関関係（雑誌記事） 学歴による離職率（雑誌記事）	他学部教員への聴き取り調査
H28-C	シンガポールのバイリンガル教育の導入	世界学力ランキング（WEB記事） 中学生自宅学習率（WEB記事）	
H28-D	長期の生活体験学習	子どもの日常生活における生活体験と学力の関係に関する研究（その２）－庄内小・中学校の調査結果から－（論文）	社会教育施設への聴き取り調査

さらに綿密な分析が必要であるが、興味深い視点であった。その他の提案はこれまで学習した教育学的な基礎概念を活用した提案ではあるが、実現性に乏しい。一方、平成28年度受講生の提案内容は新たな通年授業の導入、キャリア教育カリキュラム（現実のぞきみ科）の提案、シンガポールのバイリンガル教育の導入、長期の生活体験学習といったものであった。シンガポールのバイリンガル教育の導入はバイリンガル教育の導入によってメタ認知を高めようとするものであるとしているが、根拠に乏しい。しかしながら、その他の提案は実施するにはまだまだ内容を吟味しなければならないが、実現性のある提案であった。とりわけ、新たな通年授業の導入という提案は興味深い。平成25年度にも無償の学習支援という提案が存在した。その内容は大学生が放課後学習支援をするというものであり、平成28年度のH28-Aグループも最終プレゼンテーションを作成した当初はそのような提案になっていた。しかしながら、その後、H28-Aグループは学習支援を無償で行ってくれる人材の不足という学習支援の現実的課題に気づいている。そこで、H28-Aグループは大学のカリキュラムを変更し、大学生が１年を通じて学習支援を行えるようにするために通年のボランティア単位を導入するよう提案したのである。また、H28-Bグループのキャリア教育カリキュラム（現実のぞきみ科）の提案は中学生に将来の展望を持たせるという観点からの提案であったがこの観点はH25-Cグループも持っていた。だが、H28-BグループはH25-Cグループのような一度だけのかかわりで中学生の意識が変化することはないと考え、小学校と中学校が連携したキャリア教育カリキュラムを提案したのである。

これら２つのグループの提案作成プロセスが生じた成果は「経験の再構成のための質の高い問題と他者」という原理を適用したことに起因すると考える。上述したように、高知県の中学生の学力状況を確認した際、担当教員が学習支援やキャリア教育に関連した施策に関する説明を行っており、単なる学習支援やキャリア教育という提案では不十分であるという意識が受講生にあったと考えられる。また、自らが必要であると考えた小学校調査や中学校長の学力向上に対する考え方によってすでに行われている施策を吟味しさらに発展させることに没頭することができたのである。

２）平成28年度受講生の中間プレゼンテーションと最終プレゼンテーション内容の比較

次に、平成28年度受講生の中間プレゼンテーションと最終プレゼンテーション内容とを比較することによって、能動的学修化のどの部分が有効であったかを確認したい。表４は平成28年度の中間プレゼンテーションと最終プレゼンテーションの内容を比較したものである。Ⅲの１）でも述べたが、平成28年度のH28-Aグループの提案は、当初は最終プレゼンテーションとは全く違うものであった。H28-Aグループの中間プレゼンテーションの時点では、３つの提案が存在した。探究型授業実践、マニュアル（テキスト）主体の教育、高知県独自の県内学力テストという提案である。探求型授業実践は次期学習指導要領についての既有知識に基づいた提案であり、マニュアル主体の教育は授業のスタンダードについて演習の２回目で得た知識に基づいている。また、中間プレゼンテーションの時点で提案内容を一つに絞れていない混沌とした状況であった。グループ内で議論を進めていくうちに、教員の授業力向上案を提出するよりは、自分たちがどのように貢献できるかということを提案する方向へ議論が進んでいった。しかしながら、H28-Aグループは、高知市教育委員会への自主的な調査によって、放課後学習支援の課題に気づいた。それは学習支援を行う人材の不足という課題であった。そこでH28-Aグループは大学のカリキュラムを導入するよう提案したのである。この変化は高知市教育委員会への聴き取り調査に起因している。

３）平成28年度受講生の変化

最後に、個々の受講生に焦点を当て、演習の事前と事後でどのような認識の深まりがあったのか

＜表５　平成28年度受講生が演習前後にあげたキーワード一覧＞

	キーワード1	キーワード2	キーワード3	キーワード4	キーワード5
A1-1	中学校現場での教員の教務力の向上	教師の言葉がけの改善	生徒本人の学習に向き合う姿勢	家庭（保護者）の在り方	小学校教育との連携
A1-2	学力の現状把握	基礎学力の定着	ICT活用指導力の向上	声掛けの改善	「分かる喜び」・「できる楽しさ」を実感することの出来る授業
A2-1	家庭学習の充実	家庭環境の整備	学校、地域、家庭の連携	学校の組織力の向上	将来を描きやすい環境づくり、授業の導入
A2-2	家庭学習の量・質の向上	学校の授業の改善・新しい授業の導入	地域との連携	基礎的な力の定着	チューターの改善
A3-1	家庭学習	基礎学力	アクティブラーニング	－	－
A3-2	*基礎学力*	学習チューター	学習意欲	向上心	主体性
A4-1	家庭環境	経済問題	学校	生徒主体	－
A4-2	教育の質	子どもの質	公教育	教育の目的とは	－
B1-1	将来について考える	学力別少人数制	放課後教室	学校と家庭との連携	チーム学校
B1-2	キャリア教育	自己肯定感	チーム学校	家庭の在り方	無料で勉強できる場の提供（放課後学習室・無料塾）
B2-1	学級経営	学習しようとする環境	進路	私高公低	県民所得
B2-2	学習意欲	将来なりたい自分の像	キャリア教育	よのなか科	情報編集力
B3-1	進路選択のビジョンが見えていない	経済格差	地域の学力差	－	－
B3-2	キャリア教育	基礎学力	夢をかなえるためのビジョン	家庭学習	情報編集力
B4-1	学習環境の充実	生活リズムの確立	小学校との連携	家庭学習の方法	自己肯定感
B4-2	将来の見通し	学習意欲の向上	学習環境の整備	自己効力感	学校・家庭・地域の連携
C1-1	－	－	－	－	－
C1-2	メタ認知	自己肯定観	教師自身の学び	主体的な学び	授業の質の向上
C2-1	保護者の学力に対する関心	勉強をする習慣	メタ認知	経済的格差	携帯電話の長時間使用
C2-2	職業意識	様々な機関との連携	学習の習慣	*メタ認知*	家庭学習の充実
C3-1	家庭学習の時間	クラス環境	家族の子ども・勉強への関心	上下関係	経済格差
C3-2	家庭学習	自分を見つめなおすこと（メタ認知）	親の協力	教師の努力	生徒自身を変えること
D1-1	学習意欲の向上	学習環境作り	教科ごと指導方法の改善工夫	家庭学習時間	－
D1-2	主体的な学びの姿勢	何事にもチャレンジ	生活習慣	人間関係（先生やクラスメート）	保護者の教育への関心
D2-1	学校と家庭との連携	学習内容への興味・関心	公立中学校の学習環境づくり	家庭の学習環境	－
D2-2	家庭の教育力	生徒の生活習慣	学校と家庭との連携	自尊感情	母子・父子家庭の割合
D3-1	生活習慣の確立	家庭の問題	社会性を育てる	－	－
D3-2	生活体験学習	生徒の自尊感情を高める	保護者の説得	負の連鎖を止める（親の意識を変えることで子どもの意識を変える）	保護者の理解を集める
D4-1	放課後教室	学習支援員の充実	大学生との連携	キャリア教育	生徒の自己肯定感
D4-2	生徒の自尊感情	子どもの勉強に関する親の関心	勉強しなければならないという空気	根拠あるデータ	生活体験学習

を確認したい。教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の受講生には、オリエンテーション時と最終プレゼンテーションが終わった後に、「高知県の中学生の学力向上」を考える上で必要なキーワードを挙げてもらい、キーワードを使って自分の考えを記述してもらっている。表５は平成28年度受講生の結果である。なお、Ａ－Ｄのアルファベットはグループを、ハイフンの後の数字は事前(1)と事後(2)を識別するために追加している。また、薄い色の網掛けは事前事後で変わらない意見、濃い色の網掛けは最終プレゼンテーションのタイトルや内容とあっているもの、*イタリック体*となっているところはそれらが両方重なっていることを示している。

表５をみると各グループで最終プレゼンテーションのタイトルや内容がキーワードとしてあげられていることが分かる。例えば、Ｂグループに所属していた学生はいずれもオリエンテーション時にはキャリア教育が「高知県の中学生の学力向上」を考える上で必要だとは考えていなかったが、講読や討議を通じてキャリア教育を中心に学力向上に関する知識が再構成されていった。以下の文章はＢグループに所蔵していた学生（Ｂ2）の事後アンケートの内容を抜粋したものである。

「教育科学基礎演習Ⅱの授業で『高知県の中学校の学力向上』を約半年間考えてきた。このテーマの案を班で話し合うと、いつも最終的に『学力って結局何であるのか？』という問題に突き当たっていた。２学期の初めあたりは、単純に『テストの正答率が上がる＝学力向上』と考えていた。この考えでいくと、ドリルをひたすらやり込む、さいあく答えをテスト直前に丸暗記すればよい。しかし、与えられた問題だけが解けたとして、それは本当に学力なのか？これが学力というのならば、社会で生きるのに学力なんていらないことになる。（中略：筆者）社会では答えが一つではない複雑な問題がたくさんあるだろう。こういう問題に突き当たった時に、自分なりの答えをだしていけることが、社会を自分らしくい生き抜くのに必要だと考える。そして、この力、つまり、『情報編集力』が私は学力であると考える。」（事後アンケートより抜粋）

この学生はオリエンテーション時には「学級経営、学習しようとする環境、進路、私高公低、県民所得」をキーワードとしてあげており、高知県の特徴や学校が抱える問題を中心に知識を構成していた。しかし、演習の間に、学力についての講読や討議がなされ、中学校へ訪問し中学校長から「全国における順位が問題ではなく、何のための学力かを考えることが必要である」という話がなされるなどの経験があって、学力とは何かという本質的な問題にぶつかった。この中学校長の意図は以下のようなものであった。「自分の生まれた場所、育った場所に自信と誇りを持たせることが教育の大きな目的の一つであることを教師自身が認識して、具体的な教育実践を行うことが重要である。校区には、坂本龍馬の生誕地がある。龍馬の生き方や考え方に学ぶこともその一例である。このことから、学力とは自分自身の生きる糧であり、社会に貢献する力である。」こうした学校現場の哲学とふれあうことから、受講生の知識構成が揺さぶられ、学習意欲や将来像といった生徒のキャリアとの関連から知識を再構成し直していることが分かる。

たしかに、一見して知識が再構成されていないと見なされる学生もいる。例えば、Ｂ4の学生は事前と事後のキーワードが２つ一致し、Ｂグループのプレゼンテーションのキーコンセプトを記述していない。しかし、以下のような事後アンケートの内容を見てみると、学力向上についての知識構成を明確に生徒個人の問題から教員の働きかけの問題へパラダイムチェンジしていることを読み取ることができる。

「高知県の中学生の学力向上について考えていく中で、初めのうちは、生徒自身に問題や課題があるのではないかと考えていた。しかしながら、教育委員会へ訪問させていただいたり、実際の教育現場の声を聞かせていただき、指導する側・支援する側として出来ることのほうが多いのではないかと考えるようになった。（中略：筆者）学力向

上を考える際に、生徒に目を向けるばかりではなく、指導する側・支援する側として何が出来るのかを考えていくことが重要であるということに気付くことができた。」（事後アンケートより抜粋）

おわりに

最後に、教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の目的がどの程度実現できたかについて述べておきたい。演習の目的は、受講生が「高知県の中学生の学力状況についての知識を獲得すること、学力問題一般についての知識を獲得すること」に加え、「正解のない問題に対して、知識を再構成し提案する能力を身につけること、知識を再構成するために他者と討議し、能動的な活動を行う能力を身につけること」であった。前者に関しては、最終プレゼンテーションの後になされた、中学生の学力状況についての質問に全員が答えることができており達成できていると考える。後者に関しては、本論文で述べてきたように、いくにんかの学生には明瞭な知識の再構成が見られた。再構成が見られた学生においては、特に学力観や教育観を中心に知識が再構成されていた。この知識の再構成に影響を与えたのは、講読された文献のみならず、文献をめぐって討議する他者、調査を行った先の他者の意見であった。また、能動的学修化の原理を適用した演習内容によって、学生は主題に自らを主体化し、知識を再構成するための能動的活動が促進されたと考える。特に、文献購読と討議によって受講生は主題に深く取り込まれていった。主題を自分のこととして考え、主題がオーセンティックなものになることによって、さらに能動的活動が生じたと考える。

以上のことから能動的学修化の原理は有効であると考えるが、一人ひとりの受講生を学習の主体としたかについては疑問が残った。三宅によれば、能動的学修において重要なことは①みんなで解きたい問いの設定、②互いの考えの「違い」の見せ方とともに、③一人ひとりが納得するまで考えられる自由度の保証の仕方であった。演習ではグループを構成したが、それによって一人ひとりが納得するまで考えられる自由が保障されたかどうかには不安が残る。表５を見ても、最終的なキーワードにグループのプレゼンテーションとは異なったワードをあげている受講生が２名存在している。これらの受講生は納得するまで主題について討議し、納得した提案には達していないであろう。今後は一人ひとりの受講生が考えられるような配慮が必要であると考える。

(2) の註

１）高知県教育委員会「平成25年度全国学力・学習状況調査結果資料」http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310301/files/2014022800560/2014022800560_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_attachment_111011.pdf.2016/10/26確認。

２）高知県教育委員会「第２期高知県教育振興基本計画」http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310101/files/2016032400037/2-total.pdf.2016/10/26確認。

３）高知県教育委員会「平成28年度全国学力・学習状況調査結果の概要」http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310101/files/2016032400037/summary.pdf.2016/10/26確認

４）「協調学習 授業デザインハンドブック―知識構成型ジグソー法の授業づくり―」http://coref. u-tokyo.ac.jp/ wordpress/wp-content/uploads/2015/04/handbook_001-005.pdf. 2016/10/26確認。

謝　辞

本論文を作成するにあたり、教育科学基礎演習Ⅱ（教育学分野）の能動的学修化にご協力いただいた高知県教育委員会のみなさま、高知市立小学校ならびに高知市立中学校のみなさまには、学生への温かいご指導をいただき感謝申し上げます。